2025/08/03

ふたつの研究会

　最近、筆者が参加した研究会を２件ご紹介します。１件は８月２日（土）に長崎大学で開催された長崎県考古学会総会、もう１件は７月２０日（日）に佐賀商工ビルで開催された公益財団法人鍋島報效会第２４回研究助成研究報告会です。

１　令和７年度長崎県考古学会総会の感想

　長崎大学の野上先生が新たに会長に就任されて以来、筆者が同学会に参加したのは今回が初めてでした。

　そこで、懇親会も含めて筆者が参加して感じた同学会の今の雰囲気をお伝えいたします。それは「随分変わったなぁ」というものです。良い方向に変わったというべきで、とにかく明るく、フレンドリーで、活気があり、性別も年齢も官民も派閥も関係なく、和気あいあいとした雰囲気です。誤解を恐れずに書くと、まるで「大学のサークル」という印象でした。大変楽しく、居心地の良い時間を過ごすことができました。私もこれまで多くの研究会に参加してきましたが、雰囲気の良さでは最上位に位置するのではないでしょうか。野上会長のお人柄と寺田副会長をはじめとする事務局の献身の賜物でしょう。今後益々の発展を祈念いたします。学会に少し足が遠のいている会員の方々、再考の余地ありです。

２　長崎県考古学会総会報告について

　筆者の関心はもっぱら縄文時代前期から中世にあるため、今回の４本の報告に関しては、当初あまり興味を引かれなかったのが正直なところでした。

　しかし、聴講後の思いは大きく変化して、いずれの報告も大変興味深く、大変印象に残るものでした。概要と感想を披歴することにいたします。

写真１　長崎県考古学会総会の様子

１）森 悠統（対馬市教育委員会文化財課）「対馬市越高遺跡の調査成果について」

今年３月に国指定史跡となった同遺跡の調査成果の発表でした。これまでの総括報告書やマスコミ報道、さらには文化庁の芝康次郎氏と森氏の対談を収めた文化庁による YouTube 動画「遺跡へ行こう　対馬編」などで同遺跡の内容は広く知られるようになりました。今回筆者が注目したのは遺跡保全に関する実績で、同遺跡に限らず、対馬の海浜に接する遺跡は海蝕と鹿の食害によって自然破壊が進んでいることが危惧されています。越高遺跡も例外ではなかったのですが、今回、ふたつの保存整備工事の実施により自然破壊を防ぐ効果が実証され、一定の成果を上げたことに安堵しました。

（２）小川慶晴（長崎県埋蔵文化財センター）「島原市稗田原遺跡の発掘調査成果について」

県道改良工事による緊急発掘調査の報告です。主な遺構としては鉄滓を多く出土した土坑（SK1）とピット群があります。前者に関しては後の質疑応答の中で南島原市教委文化財課の伊藤健司氏が、自らの調査経験から当該土坑は製鉄関連遺構と積極的に評価すべきではないかとの考えを示されました。

注目される遺物としては、主に中国で遊ばれている象棋（しゃんちー）という日本の将棋によく似た遊戯の石製の駒が出土しており、全国では３例目となる発見であるということでした。

また稗田原遺跡が所在する「三会（みえ）」に通じる地名を古記録に見出しているところが興味深い点でした。戦国時代の日本を記録した鄭舜功の『日本一鑑（にほんいっかん）』の中に「三江」の地名が記録されており、付近には「島原」「口野津」「有馬」の地名も見えており、「三江」が「三会」である蓋然性は高いと思いました。いずれにせよ発掘調査担当者の出土品への探求心は大いに賞賛されるべきであろうと感じました。

（３）賈 文夢（長崎大学大学院多文化社会学研究科）
野上建紀（長崎大学多文化社会学部）
「五島焼の窯跡と製品－2016～2024 年の調査から－」

五島焼なる磁器はかねてより、その存在は知られていながら、実態はほとんど分かっていませんでした。野上研究室による 2016 年の分布調査から始まって、測量調査、さらに近年の窯跡の発掘調査にいたる学術調査は長崎県の窯業史にとって画期的な業績と評価されるべきであろうと思います。発表者の賈（か）さんを筆者が知ったのは 2021 年度多文化社会学部研究シーズ育成事業「近世『疱瘡墓』に関する基礎的研究」報告会をオンラインで視聴した時でした。「女性ながら」と言う表現は、今日的には適切でないかもしれませんが、人里遠く離れた山中に単身分け入り、ひっそりと遺る疱瘡墓の実測、拓本に挑む中国からの留学生である彼女の並外れた行動力に驚いたことがあ

ります。今や大学院で研究室の学生を牽引する存在に成長されていました。
　それにしても民宿を借り切っての窯跡の調査は、熱中症やマムシ、マダニの危険とも隣り合わせの中で、それでも現場主義を貫かれる野上研究室の姿勢には頭が下がる思いです。

（４）宮武直人（長崎県埋蔵文化財センター）「陶磁器製手榴弾に関する二、三の考察」

　筆者は旧日本軍が陶磁器製手榴弾を生産し、実戦でも使用していたことを本報告で初めて知りました。昭和１９（１９４４）年７月頃から生産が計画され、その半年後の昭和２０（１９４５）年２月には戦地に登場しているということでした。
　報告者は同手榴弾の先行研究に導かれながら、その特徴、炸薬（破壊的爆発に使われる火薬類）と填薬（炸薬を充填すること）、戦地における出土事例などを丁寧に追って、考察に及んでいます。その論証過程の緻密さが本稿に説得力をもたらしているのは確かです。かつて『西海考古』創刊号に掲載された小松旭氏の「防衛食容器に関する一考察」を彷彿とさせる秀作であると感じました（註 1）。戦後８０年と言う節目の年でもあり、今後、小松論文同様、学術誌で公開されることを切に願うものです。

【註】

註１　小松論文は石丸恵利子 2022「霞地区出土の防衛食容器とその特徴」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要 』13 において、研究史の中に位置付けられ、ウィキペディアでも引用されています。

３　公益財団法人鍋島報效会第２４回研究助成研究報告会の感想

　筆者が同報告会に参加したのは今年３月まで唐津市教育委員会に勤務され、４月から佐賀県文化課に転職されて、現在は吉野ケ里遺跡を担当されている立谷聡明氏の報告を聴講するためでした。タイトルは「古代松浦郡の成立過程に関する考古学的再検討」というものです。ご存知のように古代松浦郡は長崎と佐賀両県にまたがる広大な領域を有しており、そのために同郡の研究は県という行政区域に分断され、両県にまたがった俯瞰的な研究に乏しい現状がありました。冒頭氏は出身が五島市であること、初任地が唐津市であるという事実に触れ、両県にまたがって古代松浦郡を考察できる立場であることを表明されました。
　本論は今年秋に刊行される研究報告書に掲載されますので、本稿ではレジュメをさらに要約した形で内容を紹介するに留めます。

【序章・第１章】県別に進められてきた古代交通路・地名比定研究の現状を整理し、両県を俯瞰した視点と松浦郡成立以前も含めた様相の把握という課題を提起されています。

【第２章】当地の古墳時代後期後半以降の横穴式石室について検討されてい

ます。

【第３章】郡衙の域内と想定される中原（なかばる）遺跡の遺構と遺物を整理すると共に同遺跡の北部地域の考古地理学的検討から同地に何らかの拠点があったことを推定されています。

【第４章】古代交通路（官道）復元のため唐津市東部および西部の遺跡出土遺物や遺構の整理と併せて官道に関連した当地の地名を研究し、後期古墳の検討結果も用いて新たな交通路の復元を行われました。

【終章】　第２～４章のまとめを行い、各県によって分断されていた既存の研究にはなかった新たな視点や交通路を提示されました。

文責：古門

写真２　公益財団法人鍋島報效会第２４回研究助成研究報告会の様子